Clover Newsletter

クローバーだより

2026年 4月号

「くつろぎカフェ」蒼天の下 春祭り！

@TSUMUGI.AN

詳細はこちら（Instagram QR）↑

3月28日（土）つむぎ菴（京丹波町下大久保）との共同開催で、くつろぎカフェの春祭りを行いました。

たくさんの人が集い、暖かな春の日差しに包まれながら、会話を楽しみ、餅つきをし、各々、紙芝居を聞いたり、アートを鑑賞したり、歌声を聞いたりと、ゆったりとした時間を過ごされました。

ついたお餅は、ぜんざいや、きな粉餅、餅入り豚汁といろんな味でお腹を満たし、盛りだくさんの内容で、楽しいひと時でした。 地域の方々や、支援者の皆さん、ご協力ありがとうございました。

NPO法人クローバー・サービス
京都府船井郡京丹波町橋爪桧山53
■TEL（0771）88-5014 / ■FAX（0771）88-5017
■e-mail: info@cloverservice.or.jp
■ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://www.cloverservice.or.jp

クローバー・デイサービスセンター
京都府船井郡京丹波町橋爪桧山41-1
■TEL & FAX （0771）88-0138
■e-mail: day@cloverservice.or.jp

facebook QR

有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、鄧南光撮影の「東京の女性たち」（1930年代）

人で、そちらの著作もあった。

彼の代表的翻訳には、龍應台（りゅうおうたい）の『台湾海峡一九四九』、『父を見送る』（いずれも白水社）や呉明益（ごめいえき）の『歩道橋の魔術師』（河出文庫）、『自転車泥棒』（文春文庫）などがある。

龍應台はエッセイストで元台湾文化部長（部長は日本の大臣に相当）。彼女は筆者と生まれが十日ちがうだけの七十四歳である。

呉明益は天野健太郎と生まれがひと月ちがうだけ。

最近、世の中は、「個人情報の保護」と、険のある目つきですぐ閉じ込もってしまう。筆者はヒトを理解したいのである。そのために、そのヒトがいつ生まれ、どこで生きてきたかを知ることは基本である。

翻訳家天野健太郎

天野健太郎の御蔭で、台湾のすばらしい本が何冊も読めた。二〇一八年、彼は膵臓癌で突然亡くなった。一九七一年生まれだから、まだ四十七歳だった。京都府立大から、蔡明亮（ツァイミンリャン）の映画に影響を受け、台湾師範大学、北京語言大学に留学。帰国後、短期間で一七冊もの台湾書籍を翻訳した。俳

陳柔縉（ちんじゅうしん）の著作

さて、天野さんは陳柔縉のコラム集、『日本統治時代の台湾』（PHP）も訳している。内容は題名通り。かつての台湾と日本の事情が、エピソード的に知れる好著である。残念ながら、彼女は五年前、バイクの追突事故で亡くなった。一九六四年生まれ、まだ五十七歳だった。

その陳柔縉の遺作が『高雄港の娘』（春秋社二〇二四）。訳は田中美帆、夫が台湾人で天野健太郎より二歳若く、同じく台湾師範大学で、台湾史を研究した。

実在の郭孫雪娥（かくそんせつが）をモデルにした孫愛雪（そんあいせつ）の一九三〇年代から二〇二〇年までの日台を跨ぐ女一代記である。

愛雪は両親ともに教師で、小学校、高等女学校に学び、三井物産高雄支店に就職する。日本の敗戦、引き揚げ後、国民党の独裁下で、父は香港に逃亡。東京で衣料品販売を皮切りにレストラン、クリーニング店などの事業を展開する。夫は台湾独立運動に奔走、彼女は資金面で支え、製薬会社の経営も引き受けてしまう。

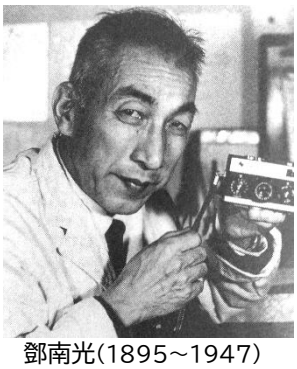
台湾は、選挙の投票率が毎回七割を越す。原発の再稼働や同性婚など、一人一人の参加による住民投票で決めようとする。蔡英文が総統を二期務めた直近の台湾は、二十世紀の歴史小説、回顧録、伝記の出版がつづいている。過去の検証と民主的社会はセットである。正逆の日本が底抜けの衰退をつづけるのは当然だろう。

朱和之（しゅわし）『南光（なんこう）』（春秋社二〇二四）

鄧南光（とうなんこう）は新竹（シンジュー）の近郊、北埔（ペイプー）の出身。北埔には、鄧家別邸が鄧南光映像紀念館として一般公開されている。

三万人近く（推定）が犠牲となった白色テロから三十八年間、世界最長の戒厳令下で、日本統治時代の南光らの写真は、危険物として埋もれてしまった。朱和之は、その南光の写真家としての生涯を小説家した。

南光の写真に対する考え方、撮影、現像、焼きつけの緻密な描写は、朱和之の創作である。彼は作品化に当たり、これまでの知識に加え、写真技術の勉強をやり直した。ライカなど昔の


鄧南光（1895～1947）

カメラの構造や機能の細かい説明にも圧倒される。

鄧家は、南光を中学時代から東京に留学させた。法政大学に入り、カメラ部に所属する。

小説に一貫するのは、あくまでも南光の写真家としての生き方である。台湾の百年の政治状況への抵抗を仮託しない。会話と地の文や時間軸を錯綜させる特徴ある文体は、しかし、あくまで軽やかで風通しがよい。朱和之の物語り方は、新鮮で清潔である。訳者は、中村加代子。陳柔縉『台湾博覧会1935』も訳している。

陳澄波「私の家庭」(1931年)

柯宗明『陳澄波を探して』(岩波二〇二四)

日本は、台湾人にも入学できる学校として、総督府国語学校(のち台北師範)を作った。一九一〇年、静岡出身で欧州帰りの石川欽一郎が、美術教師として赴任。彼の影響は絶大で、東京美術学校(現東京芸大)に多くの台湾人学生が留学した。

陳澄波(一八九五~一九四七)もその一人で、一九一九年設立の帝国美術院展覧会(帝展)で二回入選する。

台湾に戻り、当時の高等学校の教師になろうとするが、「二等国民」は採用されなかった。

上海新華芸術専科学校から声がかかる。西洋画科の主任となり、中国を代表する画家十二人に選ばれる。妻と三人の子供を嘉義から呼び寄せ、家族で暮らせた時期である。

日本の敗戦後、どの国を祖国とするかで、彼はあくまでも孫文の三民主義を信じ、国民党を支持する。嘉義の議員にも選ばれ、国民政府歓迎準備委員会に加入。副議長として、政府支持の演説までしてしまう。

国民党の暴力、弾圧に人々の不満が高まる。嘉義では、学生と南京からの派遣部隊との銃撃戦も起きる。陳澄波は命がけで軍に平和解決を求めるが、拘留され、嘉義駅前で公開銃殺された。

陳澄波「西薈芳」(1932年)

彼の作品は世の中から長く消えてしまう。小説は、作者不明の絵の修復を依頼された若い売れない画家(阿政)と新聞記者の恋人、方燕を狂言回しとして進む。絵の謎を解明しようと、実在の多くの人々に話しを聞いて回る。一種推理小説のようで、かつ一九八四年のまだ「危ない」時代設定ゆえのサスペンス小説の味わいもある。陳澄波の作品は、香港のサザビーズなどのオークションで、今や十億円ぐらいで落札されている。

陳澄波は、国籍が清、日本、中華民国と変わり、挙句の果て、政治的に殺された。この百年の歴史を台湾の人々は内在化し、それをもとに台湾の社会の行く末を考えているのである。

栖来ひかり

『陳澄波を探して』の訳者である。一九七六年、山口県出身。台湾に二〇〇六年より在住。台湾人と結婚、文筆家として、最近よく目にする人である。昨年公開された記録映画『湯徳章』の監修協力にも名が見える。湯は父が日本人、母が原住民、四十歳で国民党軍に台南市で公開処刑された。

栖来さんは、『世界』二月号で、白色テロの時代を描いた『大濛』の台湾での大ヒットの様子も伝えている。監督は『熱帯魚』、『祝宴!シェフ』、『一秒先の彼女』などの陳玉勲である。

4年半ぶりに「ヘルパーの集い」が開催

↑ごはん屋「季譚」(京丹波町保井谷)にて

3月31日（火）京丹波町で訪問介護事業を行っている4つの事業所（まごころサービスあい愛、長老苑、京丹波町社協、クローバー）の職員10名が集い、会食を交えての懇親会が行われました。

食事を楽しみながら、日頃の活動においての情報交換や質問などが飛び交い、事業所の壁を越え、同じ訪問介護を行うもの同士、いい交流ができました。

また次年度は、合同の調理講習会なども開催できたらと、ヘルパーのスキルアップを図る計画も出ていました。

3月のデイサービス

コンサート

3月13日（金）地元のバンドを含む5つのグループによるコンサートを開催。演奏と共に歌ったりと、にぎやかな1日となりました。

また3月29日（日）には、質美人形展に出かけ、3月31日（火）には丹波ひかり小から、2名の児童がキッズボランティアとして参加してくれました。一緒にレクリエーションをしたり、利用者さんも喜ばれていましたが、参加した児童たちも楽しかったようで、また来たいと言ってくれました。

キッズボランティア

質美人形展

<賛助会員>

(有)あさひ堂
(株)一谷住宅
イン・ザ・ルーム亀岡店
上段税理士事務所
(株)高木設備
たにやま鍼灸整骨院
田端輪業
(有)土佐寿司
(有)西村テレビ
みづほ電工
理容ちどり

（五十音順）